

告志篇

完

同本/83

□ 9

3460



1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

告口志一篇

我等漸老むが故に我程文辭も少しく失ふ
ゆゑ包三事でい我おの意をもおおむかへず
そこで活字の角字もあくまでも古字にて一冊とあ
と侍の老々も敢て老成の人ふやさんとおなじ人
か年後進のやう見えびらけびりても二本(おもて)
大幸の事(おもて)

支人も貴様より候ひ少く御心かと思ひ恩と舊しゆうじゆうと
事一トモ御本多く 神聖の國ナリ 天祖 天孫一



9
460

□ 9
3460

統と垂ヨ松と遠カシヒテ以草野庭ニ君大陽と其子
黒鷲ナリ。家給の大任あり天壇と其小廟ナリ。君臣
父子乃幸也。名食住の日用ナリ。且是
天祖の恩美ヤ一て庶民承く机きの達と矣。天ト
敵と非至の念と萌ナシ。難有トアレ思ミ。至多事也。
然れども私年ナキ。久キナシ。慶喜ナキ。生ハ御ナシ。或ハ
治ナシ。或ハ礼ナシ。永禄天正。うやうや天外のれぞ。天外
東照宮奉事。御せらむ。梅風満雨。辛苦艱難。まし
シ。天朝と輔。堂モトモトトハ諸侯と祇。持ト。二三百

年。今ハムラク。トテ。天ト奉山の安キ。と仰。ち人医。満義
の苦と免。ウル。生。此。かく。奉年。の。佐。浦。小。游。た。ハ。是。不
承。立。ム。る。も。や。ア。ル。ハ。人。た。ム。の。役。也。神。の。も。キ
ハ。ト。天。祖。の。恩。美。ト。と。志。立。ハ。ト。次。又。役。也。ト
天。祖。の。德。深。と。も。う。セ。も。得。ハ。ヤ。ホ。勝。ト。と。也。我
更。休。ナ。テ。士。民。の。と。小。立。キ。ナ。シ。ア。ハ。役。ど。を。社。の。候
度。ナ。シ。ト。天。祖。及。也。そ。色。の。恩。浦。小。游。不。可
以。カ。ト。ニ。位。の。も。キ。と。汗。ニ。家。の。重。き。小。列。ト。天。ト
の。廣。度。モ。も。知。ル。ト。ハ。國。泰。ト。而。走。ト。士。民。を。接。育。

本と恩の恩と私しアリ日承らむとる事も
我おのやと接する事も又も思ひ考へ事と恩を
私ひ人をアリこの人の生れが於小ある事は思ひ
覺き小梅が極手頬潤^潤も寧何人アリやアリ何人や
有爲者アリ若是アリ此を善とせば必竟善と稱
アリナムニ古の明君賢王と慕い各ニ古の忠臣義
士と仰い至世より興小他國の事例ともあり後代かハ
能タヌミ例アリ其の名までもアリハ後日よと云ふ事アリ
乞を仰ぐ事無我お中を承あゆる事無御年を乞
之を

至政ノ如クナガラキトモ亦知小角小吉政と下一致
して紹介シテアリノハジツノナガラシ草集と
此小一致して其後と承ヤ一因多と本興一系多との
輔と浮く 天朝ムニ付恩と報一多不於てハ
まくも私事と以て右者アリ我おト移志とあリ我主と
一テ 天朝ムニ付の少恩小省アリメナルハ勿モア
事小多々今クアドホドと云ふ事アリハ常ニハ
往う忠小内も無ナドウや然レヒナリと云一日移

従小見と送りへうじて私心をせうそを終天かと
まを乞ふ食あくせ仕終ひをと孝みと當へ不そも多め
一擧にうはえ庶人士のまこと死死アトモ孝終も天子
すゝ庶人士のまこと至る端へんのう孝もまた生お
ええ、挿入へく 天祖 東照宮の沙恩と歎せんトハ
悉く心持眼氣めいきの君父と極きわめくらへ 大羽
ス近ちかトモトモうながと西にし、やの前まへア如ごく氣き
角くづりの身みと方ほうじよ立たつこと用もちひり
自じ由ゆうと立たつも立たつもアリとしモトとも 天祖の

恩章おんじょうにて天祖と教育きょういくせし 東照宮の徳とくにて
もあちよくわざわざ之君父天祖の厚愛こうあいにて而ひて漏ぬけ走はし
強つよち也よ奉まつ年としと経たどせを度わたよほほしもと之のと
是れは是ぜうする事ことトシヤ思おもうくも今いまの
天祖てんそトト 天祖の日嗣ひし爲あつ方ほう今いまの 肝きんあ別べつ
東照宮とうしょうぐうの御孫みこ小こ爲あつ主しノ省あつ御ご我が父ちちの血脉えきみゃく
トト多おくお先祖せんその事業じぎょうを継つめめる事ことトト此こ不ふ能のう
あ能のうし 天祖 東照宮とうしょうぐうの御恩ごおんと謹つつせんと有あいが君父
先祖せんその恩おんを榮さかええららとものか幸さいやうめんと名な天祖

の恩と私とんと思つて服部の居へかなを申して
きてるまゝに一ちりがおちまのそばへりて下さるは従弟
の役とあらまつ役とお下へらしゆせりて在りて
文武とまへ一段とあらん武士たちのことをとて
一そくやせぬとまもてゆきゆきとてたそよ文盲にて
お隠すとおも思ひもゆうならむて今川不條不知
文三郎武三郎と存鷹利とても云済き小僧てを
仰ぐ無ふとまの兵文とハ漢國のとくとて御名ひ
たぬまさびやうひとて泥ナガミキモトハ天祖天孫なり

雅好をくらむ生ものをすかく我おゆづくと御室の
ひととまうい侍男マラや小石臣文子の大倫マタタクから漏れ未だと常め
お子娘マダムのとて尚三郎とゆき義姫マダムとて
時代の昔より傳うるるとしてたま文節マダムとて文
字こそ毛毛とては云ふとて大正とてまよと
風俗マタタクのとてあると真邦小脇マタタクも威後マタタクの健マタタクとて四事
小鹿マタタクを仰一つ事頃マタタクたまてゆきとて経マタタクのとて經マタタクのとて
賢士達文小人マタタク取て云ふとて経書マタタクと異國マタタク小求め
たる左漢土の事務マタタク源マタタクもて孔子マタタクは云う米國

かて孔子の名と字をもすに中國にて孔子の名と字を
やめられたる堯舜とあることかく

天祖

天孫とまでしてこそ孔子の名もけりれ無事和学者
流祖との名と云ふのみなりとて返らるはうふぢや
彼季事の伝教とあくか作一我父也先祖と云ふ
佛と唱きて極大にあては漢文の古事記とて言ふ
さらば遠のき一きききききや徳くはとあし文をと
ゆるせ小ちまちぬくとある也我すやもてひそし
義と送別のも大辭體て帰郷と是れ我満門て

脇殿と云ふのまたと決一の御座と別つ公学間小あくに
トモ一作赤炳也と云ふ者也と云ふの士尼耶馬也の
別名も有一士ニ武帝の年と辛巳一元とヘキ端末
向ふてぞじれと云ふ一公学問書生と云ふ
名不詳す学士不詳す公の名也が承後
これと傳る乞ホノミと寔ニ云と畏々者云々云々
士と云ふに至らず士をもと云死にと云ふも云々
但義ト云うと云く翁一とす彼山城屋塗の死元と
死らるゆきちがへ一云今と格まぬとのミ士と

いふと是のへじさるまへ一彼禽歎とく團山席で
金とうべえすとく一他聞し他外れとて士とせば
鶴かのあもさるも一ヤえとのもくとくやふわ
文字のゆきはりきりとくをもやかすとてよしも
キよ候る文武二かくま本義とむ一かく自小修習三
人と仰年と学び也も年月とおことせず三ゾヘと
あくらけくふとく一熟の要多本草堂とて下
教へてつゝほれ文がやくちのこじくねもすとくと
間へくるとれりぬまくとくの仰年とも大もすとく

ソアリモテアモセ仰年と事カ内リモタシムニ成る事
こと秋つば行候え年もとれのそくとて年もて
せざるは事不等一多手不思ひもあざる事より事
候と秋系源流と清て名所とも。年もれにせれのそく
ゆてあ多す文武たふ此年の名ハ尚文於中一ゆえと
一往秋霜をよしアビ待文至考と至早一を文と
くにらる深刀ホフ事ととととととととととと
モハ文武の技ととととととととととととととと

文武の技をまじめとす。まことに人間にて人の人をも
ほとからぬまを猶恵情にてさそらはともとぞ教誨す
汝すまきまわらじと年又一程ア撃風とまへ己ハ
掌向を勧めざして人の湯と勧洗サウセツ。武藝而下して
仰形刀劍といふ。或は志義達信等と称して
格闘術教と名トシ。人の洋海事事の批判あつて
費一才と呼のあひと稱る半身ハーフシルフと名カリ
主あるがわら風氣せやもゆく。君子訥シタニ。言
而故に於行とこそ行ひ。小ち行疏。抑へ何以も

心也是皆志士の心也。して己と省うの心も左矣
べ。併てハ心識をめぐるをもト。恭敬の心と
五味の心。徳の心と心と歸るの心と止て沉鬱と
尚い萬事律儀の心とある。作可ひと云はば
直徳と云ひ。又太臣小臣の差別と申れ。ハ
差の心と云ひ。かくてハ直中一筋よむ。えふゆく。後經院
史の心と始め尉卿書政の心と申す。でもう心も
とととくふくと大ト重あ。用ひ至れども。集ても
大歎。ひとと圓滿の用ひ。併せ其意を度大歎も

おもふ事もあらずや。我等のくすりやの事とば歎め
まうて空海のことをいはせしとまつて一筆を
除ばば又一筆とまつて後題りゆべ、アモモセシトモ持南
のよハ句論忙年修業のよモトと申て名前正心
御意のよとアリ。また支度の人ハ君の人よハ大切に思
せば在り。思ひもよ。かくして我おもむかず阿斗内小政すせらる
び候へ者心地ぞし想又は御心のい相おアサギ人ふくふく
もれぬとぞ。往來おもて文書は皆手筆矣
お支那より日本今たまれど。社政支度忙

脚引たるもあきれあり一本のいん持、領は組まゆかとせ
ゆすはしのやまとくとくとくとくとくとくとくとくとく
事多々入るの事多々とくとくとくとくとくとくとくとくとく
取支金連属一のりくにせりていやけよすれ支取とく
のちるよえをとどもとどもとどもとどもとどもと
あゆめて、主事ともあひて又びびとぬてとくとく
已うをほしとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ゆふゆふやめかれて、一旦本ゆく、するにあの人やもあじ
史りの腰がよ直一筋、卑きはもとくとくとくとくとく

せのままで、支死の所と、従へたるもあらむと
ナリ。アモシセ埋れる事す。おれは、
是と改めて、やうやく、わがまをあく。アモ、定ふ。うつむ
居居とア食と、何ぞ、我を殺すんや。おまを埋葬せば、
頭の感として押さんとせ。食支死の、ひと激もの。こゝで
はゆる。こゝが、我おが、以為とて、おる。頭、アモ、及組合せ
萬々、おほき。母が支死の、身と、りうて、お婆に、お達か
ふとも、おまを、殺す。と、おまは、死に止まつた。
彼小説也。改小説へと、思ひ度せ。理と、まちうけた。

アモ、歌も、おぼえとて、己も、おぼえて、おまの、筆業機
あがけ。己の、生涯多幸事、お席奉るよ。一、八十回の、あを風ひ
歌、文死と、言へ。支死、歌と歌へ。お昇のれり、て、下
の歌と、廻へ。おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
四と、廻る。お昇の、手と、おと、おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
之、彼、歌と、歌へ。お升と、おと、おと、おと、おと、おと、
人、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、

秘
之ともまきせらるキ一主とくはんじし今ノ
風俗ハ目の前かでハ主と申ともか云々不編し後が
婦女の如き主と女とは或ハシカニ小邑うれか麻葉
正まりの幅の如き主と時もくらひぬまく
主とくも波多リあせびにてほの工とくして
抛弄すか小アモウ左御の年端の福と御まきりを
かめよし年日の清涼も候食衣縫の半一あくまど
全般利欲の半小是すミキリと慢一在役ハ其役を
收ヘト利として義と云ひ華麗をも一きトもて

因役の申波敷の内とも後更にまくわく大義のこむ
事とくまくまくしてハ義徳もまくしてまく
ハ主より也だらあより紀主半カテ教戒わきまく
事事の中無くあるのこわくまく滅絶くまく
化す人かても不滿とみて主ベ一況や主事のはま生
きより元どもとの朋友もまく水車水車明外の主事
いづれすとも様ハぬより者らは大うち僻事之役取
度ア本事一主小勝手もまく別も一のまつち我あふ

極きわてもあらざれぬ又見るもの多し人の多くをうちハ
以いかかれて物ものある者ひとと見ゆるふに當あくよし
一人の事ことと見るをもてこの事ことと見るをもゆゑゆゑに集
リ一せはとすて毛けた小鳥ちやう者ひとは祀まつ師し
鬼き小こ御ご馬ま四し手て金きん一人情じやう年ねん告こ易やすハ
吉よし神じんよりうめ者ひとハ御ご指さしもくく處ところかしてまつせふ
よりえど又ある人のひとのあらぬぬそ人のひとのこゑこゑをりふ
すよし修しゆ事ことを祝まつひ友ともとよとよてかみて他人ひと
達たつて序じゆのこととぞうが我わ在あ事ことある所ところ

秋あき未みや小こ夜よ回まわ役わくても毛けと人ひとは當あ人ひと
勿む帰か因いん候まわのひととある半はん生なまとて事こととぞくくの
當あ人ひと勿む帰か因いん候まわのひととて何なん役わく泥づらと因いん候まわとて
今いま月つき小こ賄まつを多おとが多お金きんとし取とり因いん候まわと
りのひと仰あ車くるま休やすととアツエテ又また勤きん易やすキきれ
多おす金きんととおとと或も勤きん向むか事ことトと有あり又また役わく
おお御ごととせらひりのひととと其その者ひとのひと多お多おと
主ぬし君きみの用もちかねのゆうわねのわねのゆう御ごととりのと役わく

主君が主従の事と考へて相ひやむさんや可
能す。ほひ事と考へて相ひやむ。己の體と被て人の体と相ひやむ。
ゆく獨りの事と何事とも我より先も。他ことを相
手仕事とも向べし又我より後事者とば私共居りト
引手れよ即ち主事と主従の事と多く事
主君の為に甚ざふ大威小威を以て因尾化尾少とも上もの者と被
あらざる。主君の討へる事と主君の討へる事と
と恨み人の主と義と被りて終更士小ハ立脚立脚さる
我ホ不肖御す。士氏の事は我モ居とハ其事の實徳をあ。

弗匿トクを逃れてア及々アシナリと申す。友人の私きハ
聖人の事か。而してオレが私き。私事の事。小川
事とすて落と居たまう。又要とすて逃れ居
るもう。一月後年若狭守。お前とお詫で。我主の事と
お車り。それを出で。弗匿トクと被り。お車とすて。ア後河内。おひ
一人や二人の事と退とをして。忽ふと即け。急とす
ケル。お多者。我主事。おまく。お半。小川。事。おまく。次
主事の法。及又父母師友の義戒とすて。勿漏オロ。ども

丈夫も亦人一木の人はハア思ひ思ひアガスミムシがすれど
雪年ハ也ハ活きて御じてハ高處の界やお霜とハ難
ノ多シハ云々と云ふ事も人とも見と督とも御す
御する事と求めて御ひも因縁ある事へ源とあま
死する事と之と之と死と死と御法とあと
内省テ不疾方の空腹脹脅もすむぬ又大医かは
考入と落り出と加減心事とハ胸の五毛し
もラク万の事とあらばヤーとまく事の事が何せ
直隣か一歳の大少浪水魚と考へ送船おもむく

極へ善惡と云ひ立たずを知らずモテて往るの意と爲り
主が衣服飲食が歴丈苦主とちうてアヒトモモシトシモ
終タの食とらず不メ本穀主民の幸苦やて人ト先祖の
勤務と以て充石すリ獨りあらふとバ食らひぬ事
は傳と云れど一脉して著と云う、其後づるは終タ
主が有るふおり豊年少し賜ひもゆかねば見えぬ事
あひ年少て民間より本穀も當はず食糧すリ枝ぢ
やあづらひて多金雇用主の程ゆう大飢て食ひ

有りて又陀暖ハ淫歎と生リ 机をハ事ひと發したゞ
ル事中の身ち勝手と極切武傷と生る事多きも
され奢後小兵一 武士一統上品小手うたるがく事今
を下車とへるんふ若二百石三百石取者も人を馬とぢら
今馬とゆく之バ反対向ふのこなせ自身、車上之役
まづ鞍枕も毛毛よじてひるぬ程小もひぬ、嘗て
わとまれて上車お車たまむかに苦のみ、自身う又、子守りて座候
臥起りとどもすり仰るも自身う又、子守りて座候
一キタリおれぬるいえまくやいわゆるねのねあらわ

有首無比と云ふが今ハ後毛も粉も直小原ノガ尚文自身
にて左近ノアラシモ出でるやうに若三面石にて御内大臣
の名と申す。さう曰承て人あがキ志いともおもむき矣
をよふてもかね陽子かよつたるひうちもれづや
唐忠とゆとり連多く集めし者も多し又刀劍とゆて多く集め
り人も有し。ひくともうゐるやうに御室の金油汲み立を磨
ぬくはと多くあひ、物語、二十九のことを集めし好事の墨家等
さと小日、勿論大臣とても珍りハ豈れども爲ひとめしも又それば
曲らがる筆のどもとの眞六更衣と申まど源氏のとくとへ

らも毛色ちどりの主ひの主と仰立るが名実半一と、その
御心地を取るのもあく筋筋（今）は誰もも知らず、かくせ
少てハ宣示第ニ歎美（さきよ）と仰りたる事無く、と雖人（すうじん）が見え
手とゆ一と別の者とづむるゆ一と信爲者と仰ぐべきを
據とと多く人の身ハ父母のまへなして、父の亡氣と死氣を已う
ても已う身と思はず、仰すて、死きゆの法也もるまゝ、吾
行はぬらるナの義を考へえも、おめで、危うきとす半々、身の發
膚と毀傷せざして、猶拘らず万人の胸を震ふ如んとぞ、此
ときの剣の者と云、（と云）其を難を難へたるまで、大庭之辟の事と

と云ひ人とゆかゆゆことともかく、ほくを歎く者と云、
行はず走赤土遠不見塵の身と、士八年の久と大切です門
を叩くも、見廻の身と、又おはなは沈醉して身ゆもとうけ
あくとあはけの一不之の身、いへよばくの者も、おやうるを
いはむ富足のものかの不景と、夜、うしもと、晝、舞、年命が多
いのと、おもむきに、はるはる口腹の身よも良モして、身ゆと、傍一
角士の御身也（アシガ）を、おもゆの身命と、生、死、不、生、も、临ま事れ
うやうきと、公卿の身を、酒、酒、す、其身と、此士の身命と、おも

まことにあまきは、浦原、波多江、まつちの瀬も、四國も半之
す處しり本とても、浦野よりかひ人あ事よきを、あくもあ事
事半もあ事、浦野よりかひ人、事よきを、あくもあ事
人きくようても、己ぞ利されば、空をと早きはやくさる
よし利とくして、八萬と曰ふと、よし利とくして、人を細も
一回利きうち、お互の事うりびり利めゆるを、もと人と
若しのても己の利と、原心とて、もと金利とぬいぬと、がほの
沙よし丸士たとて、原利保とて、一年の出入と定め、が心よ書
代の事業ともね筋木屋の傍も、紙筋の筋よ、注筋の筋と

まじめの用事で此處を暫く借りて食宿とし
まわらむと、即ちの金銀と終一子孫は後世もまた
うこす原魚うち附金銀都て放焉外様の様と見て後
うそも、前途にあつゞと八合以上と云ひて取る
ものとあつて、ゆきらかにいふ強盗は前年の事現れ
やうな事ありて、もと西門のれは大臣の子弟、其父兄の名と從
謂號よめ改名と之でもとてよ通じ、年少の御流の之等と
小臣とて、これもかくとすえに大臣の子弟へは政事も
詔勅の於君も可く身もとが多事も御も御て御も

おまえさんひよの友の会とふたば近く加年より貴重とほんま
三月を晦とねじへうつめのすりはいた臣下宣すほくも江年の内
本朝の氣と二而すまとどりこもナカ年幼とよちうそハあてぬ
沙年ア達とともねうへ一年のひよめり重慶も大権太極
事ももととくも務めぬす人之海西食事の懲は陽とく
御金キスヒ天子のよそらうとあれハ故をかてこそみだる御儀
てシムむむくとも酒とくと正儀とそよするとなけらるる
小野の威と柄と先生もあくとも御ヤキシテハあきるま壁
主とまくとちゆうがてますとあくとくらうて常の人ハあきる六日

ああ三さんよとむるえふたあきのとくとく一文書の事もあざ
けの沙をとむナカツモシロ可トノ所と申リルよもやがと
のぐさをと終席とめりとこと修業も原ルとくとくとくと
クと軽くもけくせにあ政一派に榮れとらしめとすえゆる
よし被服の被よせよハらくれ序トレカタマの西されのほる
ち一ぐようおとるみのと教育者とくとくとくとくとくと
のちのむまうとあいおほのとくとくとくとくとくとくと
しわあとせんが高士宴會は深奥ホの考後と榮ト後宿ホの

生をと命トニモも身を回のりまわ及ばれとた
不單て寳物と其がとくと至宝とタゞとひ難能とよ直るハ
御ありむまきすとぬむほゆて御もと前又ハカミと申候
おもと名後と申候し御已づゆゆの事ハ天後と申じ毛士と呼
まうと曰ハ被の事と云ふて余も主と云ひ事と思ハ
事ゆる事多うれて利あるの傳へ封をス階層すよかにほけ萬事の
全事と費して身じらむ事無くアモウシヒシテ全事の
をもとあ爲つてあも替ひゆもとハ身の役も身の役もは
ヨリハ本あやまとも沙牛もはくはく男より沙牛也

を因りては故く幽懷をもるの歎えをよ鶴したる樂いへまゝ武士
の樂として人との才藝とともに一身体とも多くなるべく其生もある
事うとハ人のために済すきを一浮遊の心はは達してあると後
代の者後のもよ弟のとゆきて一言をとも不思議能て思ひ
主の者を免りて無能ともあたかく又嘗て風流にて酒飲の無を節を
あさつあらはづの極もむとも己の居ゆて、あおむ事ある姓有三
種の淫樂と云ふことと曰ふ士は從ぬむうとひのれきに情
弱き淫樂へは令は上御ぬむじたるこよても強ふハ得不せ
号くあわく念とぞう武士の業と節の武士の樂とあるがゆ

文書上

直云極速ハ勿論元トより上(第)一あまよし三の人の私事
主ある後少第而て馬とあ入とを免れし是を若らず大を不遇と
あひ無くと自らを意ゆそら者近て痛りゆ一併大の角せざる
臣良士ハ聖賢のせふてもく國と至るへ君を寔(イフ)一とすよ殿及院
ヤハ士民の风俗もいまと改つむを國とおへて書小日と極う汝殿の
所くよぶをもと本領と附力とありしれん事すりても通一よ寄
もるゆめり能力と爲すの道をもとを差すを今多もてま

やれどお及ちつて三種と用ひ、震えとゆゑをあはと、向こもお出
いあは熱ひゆかへもあら、家主よも辰巳と度むるがちう見えはせ
まほのれぬううううううううううううううううううううううう
沙さうすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
又二三百よ定めりても、わがよ一毫もましまく、ひまく事わざの
吉三と対面せしむるより、そのうそと、お前さんとのこととも、わ
が所まで、吉三連ゆるも、おのれのほんと、おもむく、うそと、まも
うせずね、成りゆきて、おまかのわ幸ばと、おもむく、うそと、まも
うせずね、おまかのわ幸ばと、おもむく、うそと、まも

はくはくと氣の、お邊りも國へみへひもくらへ
うるひをと改めよ取てすむ事無くと終者も者
を又海原より終者も有り、そのま連ばらすも通よ
がま御、と之に國の方より改革もかたのやくして來よ
きよ御はよもひとよ其人のおもよからぬ見え難之是
ども行雨うぬ以古八方からぬい被あはれ及風浪と改め却西と
あと三日秋もと見しも今七十の二も沙原里もゆゑの沙し熱
里のよゆ中の沙三山のまよて都心ゆ、通ひ失を取ふとあら、あ

とちきりぬるめの敵人のかば政事も拘らずも厭うもゆうぢ
自らよて無うまきばかりの二方半ともてても宣戦とひ政事の浮
失役人の云々は他よりよても批判するやく^{ヨツ}ほんまんね
策をすしもあつて次役人へもと歸属どもと一毫も活動せられ
よまえりぬき高貴を極えとて御心者多めに力とゆーと
は後が今ハモとあつて御心せし處よとひに葉附せよ
もわく次ゆびにてハジ先の日向うき隊がも以ふきて一歩ととめ
して、お一歩と退きいつまでも前通りに身を繕へけ
西と考へ物のうと切替役人のふちうそが一も名前よと及ぶ

法とたゞちに一歩と齋(禪中)のまこと膳(内侍)と委(内侍)と二筋(二合
うやい萬(ひよし)とよひてハ法事のまことに自らの見はもあ限(限)狹干
ヒを引(ひき)て三筋(三合)と底(こも)の本(もと)あるの義(義)ハ神(神)ホ(ヤ)此役大
事所(大事所)あらかの体感(體感)と共(とも)もひきまきを面(おもて)のうめらばす
ゆくよハ勿(勿)能(能)も(ノ)クそ(そ)あ(あ)も(も)い(い)そ(そ)う(う)事(事)が(が)天
下(天下)一(一)も(も)亂(亂)と不(不)思(思)り(り)何(何)時(時)も(も)は(は)ま(ま)の(の)將(將)も(も)
の(の)が(が)も(も)と(と)今(今)泰(泰)平(平)の(の)世(世)も(も)豊(豊)と(と)高(高)ま(ま)の(の)業(業)有(有)るも(も)有(も)
あるよ(よ)福(福)玉(玉)備(備)うつ(うつ)り(り)や(や)兵(兵)よ(よ)世(世)泰(泰)平(平)と(と)ぞ(ぞ)

の事ちく既まで食ひ實はれ今まうも徳を蓄へる事生
きこと後よのこそ一幸あれどもよほとも急と邪氣と一も
はうるま弱の身と爲てハ士ハ四民の中の庶民ヒーそと心あ思
べ士の心と士の心と不虞の事居一又は先多も
天祀の恩アテ神國の生育アテ神言の法華アテ泰平の法源
累代あるよモ一西山の事もよくあたる一まわる財の神多ヒ
五首天網ア奉役西山の事も其も近アテ武井川財の法
づも持えキシ私事アヒトツアセ

天保四年己卯年二月廿三日

第三位中納言

齊昭



右告志篇が壬辰の秋より思召する事に政務の餘暇を擱せ即ち爲
近所の篇告爾百姓于朕志とソナムモセキモシテ即ち有者之今
茲癸未三月初て沖國又改テヨシハ延源の村而西観音山御所
にて御先と掲げしも言ひてアリトヨシ遙の御と御アホムル慶
モニモレバセル活の活善と欲ヤシモ聲也と一洗トモキアリ
トヨシ莫連ラ近ち在のれど後先トカヒヤセ民の内酒ノウソ城
アキタモ正義又帶シテナリトニテ御有事キモヤガモキモモモ
モ通モ因シモ深で自ヒモトモの志をアハ其ノルアヒシ
ナリハ篇士氏モ字ト示ト札法活化益速トヨシニスの由代干

漢せんきと國のりゆうよ記すノ本のちすゆをよみテ
侍ふるや中よ漢語をどう申ひ立候アモフリトヨシノムラ
ほする半もくへんと侍は候名と改一画絆一あらん半代
のこ

天保己年夏己孟々

松平將監相信達識





